

20 掛川藩三大文化の誕生と松崎慊堂

著 者 岡本 春一

松崎慊堂が掛川藩校教授に採択され、掛川に来なければ江戸時代後半の掛川藩が誇る三大文化(①「掛川藩校」の開校、②『掛川志稿』の編纂、③「偕楽園」の開園)の完成は困難であると思われます。

松崎慊堂は明和8年(1771)九州肥後に生まれ、8才で四宮神社の横田氏と出会い学問の基礎を学びます。10才で宗専寺へ修行に入り『公岳陽楼記』を解説して学問の道に目覚めます。そして16才の若さで儒学の道を志し、この道に深く係わろうと心に決めます。その思いが長じて単独に江戸を目指して上京して浅草称念寺玄門上人と出会い漢学に専念します。天明8年(1788)18才で努力の結果玄門上人の推薦で昌平黌に入学が許されます。26才で遂に昌平黌の教授に推薦されます。

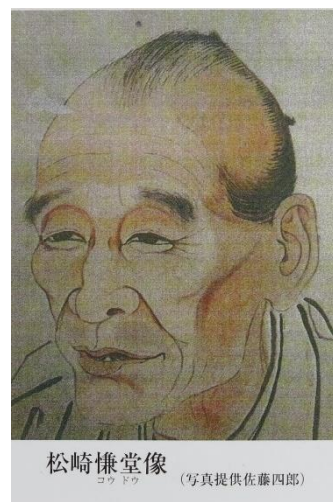
寛政4年(1792)掛川藩主太田資愛は江戸幕府老中に推挙され、「寛政の改革」の真只中で活躍します。旧田沼政権の悪政と藩士再教育の必要から、藩に藩校の建設を奨励する立場から、資愛は昌平黌林大学頭に教授の推薦を依頼します。32才の若き松崎慊堂に白羽の矢が立ち召抱えます。早速江戸藩邸に藩校を開校して「20才以下の者は稽古日には必ず罷り出よ。20才以上の者は主要の隙に罷り出よ」と訓示します。又3代目藩主となる資順の帝王学も命じられます。

文化2年(1805)2代目太田資愛が68才で亡くなります。3代目資順は早速江戸より今だ見ぬ掛川に興味深々と入城して来ます。そして前述の掛川藩三大文化成立の事業に取掛ります。この成功には藩校教授松崎慊堂の優れた企画力と熟慮の才覚が発揮されます。そして此の事業を実現する天使の役割をするのが山崎晨園であります。晨園は既に先代太田資愛時代より御用達として深い関わりを持ち、強力な経済的支援者と成っております。

○掛川藩校の開校

江戸幕府三大改革の一つ「寛政の改革」は、田沼政権の悪政からの脱却と藩士庶民の人心改革を、朱子学の教理に依って幕政改革の中心に位置づけます。その為には各藩に藩校を設けて、幕臣の教育によって意識改革を図ります。寛政5年(1793)太田資愛が幕府の老中に抜擢されますと、早速松崎慊堂は資愛の求めに応じて「興邸中学館議」を提出し、江戸藩邸上屋敷と下屋敷に「掛川藩校」を開校し、20才以上の者は稽古日には必ず罷り出よと資愛が指示します。

太田資愛は文化2年68才で亡くなります。松崎慊堂に帝王学を教授してもらった3代目太田資順は、松ヶ岡の項でも指摘した様に今だ見ぬ掛川は如何なる処かと期待を込めて到着するが、松崎慊堂の「遺文集」にもある様に、掛川藩の金庫には一両の金も無く、慊堂も下級武士と雑魚寝をする有様であった。



松崎慊堂は早速秘策を練り掛川藩校の開校策を練ります。この策に即応したのが松ヶ岡の山崎晨園で、掛川藩御用達仲間を督励して 5,180 両の資金の調達に成功した事で、掛川藩校北門書院が開校の運びとなります。藩校は武士の子弟の学問所であるから庶民の入学は許されなかった。しかし掛川藩は一般庶民の子弟も志有る者は入学を許されたのは、山崎晨園等の多額の支援に答えた事と、松崎慊堂の向学の深い思慮に依るものと思われます。

江戸藩邸に、続いて掛川にも藩校「北門書院」を建設します。藩校教授に任命された松崎慊堂は学則を作り、文化 2 年(1805)8 才以上の者は即座に入学せよ、20～30 才の者は主要の外は極力出講せよ、40 才以上の者も心掛け次第で受講せよと注文を付けます。

藩校は全国 274 藩の内 219 藩が設置します。県内では文化年間に沼津藩矜式館、横須賀藩時習館、田中藩日知館、天保年間浜松藩克明館、小島藩時習館が開校しています。掛川藩の様な小藩が県内で最も早く開校したのは、藩御用達山崎家等 8 家の強力な財政支援に依るものと思われます。

教授内容は素読(文字を声を出して読む)に四書・小学・近思録を午前 2 時間、会読(輪読させる)は五経・十八史略を午後 2 時間宛て。試験官は教授で無く城主又は家老等の前で、音訓間違えなく読む者を第 1 とし、1～2 遺忘する者を第 2 とし、3～5 遺忘する者を第 3 とする。優秀な者には褒美を与えるが、素行の悪い者には与えない。

藩校の名は当初「北門書院」であったが、天保 13 年(1842)「徳造書院」に改名します。藩校教授松崎慊堂は既に退職していたが、慊堂は徳川家慶との謁見が叶い賞揚されたのを記念に、6 代目太田資功が祝膳の席を設けます。林大学頭も招かれ儒学の真髄を語る中で、その理念に最も相応しく、藩校名も「徳造書院」と改名を試みたと思われます。更に総称としてこの時期から「教養館」とも称される様になりました。

○『掛川誌稿』の発刊

文化 2 年(1805)2 代目藩主太田資愛の逝去に依って、3 代目太田資順が急遽所領の掛川に赴任すると、松崎慊堂等の進言等に依って、掛川藩領各村の基礎調査が実施されます。之をまとめたものが『掛川誌稿』です。

調査の触書は翌年出され早速開始されます。各村の庄屋宛に「御触書」が出され、下俣村庄屋の大庭代助を案内役に廻村が始まります。編纂には斉田茂先と山本忠英が充てられます。一般的には文化 7 年幕府の地誌局が設けられて調査に取掛りますから、掛川藩は松崎慊堂の機転に依って先手を打ちます。

編纂は斉田茂先が文化 12 年まで第 1～6 巻に携わり亡くなります。山本忠英は文政 9 年までに第 7～14 巻に携わって亡くなります。両者共に松崎慊堂より先に亡くなりますので、全巻の編纂校正監修を松崎慊堂は、石川依平等と共に行って完成させます。今『掛川志稿』の原本 15 巻が山崎家で所蔵している事は、何よりも松崎慊堂と山崎晨園の深い関わりの有った事を物語っています。

○掛川「偕楽園」

「掛川偕楽園」は文化 2 年(1805)掛川城主太田資順 42 才が掛川に赴任した当時、現在の

掛川市久保に作られた保養地です。この年は日照り続きで早魃が続き、稲作も枯死する様相になっていました。藩政にも関わるだけに藩主は重臣を引連れて、小笠山神社に雨乞いの祈祷に出掛けます。松崎慊堂も同行します、帰路素晴らしい絶景の地を発見したので、慊堂は城主等と共に暫く共感し感嘆します。早速漢詩にして資順に差出します。『偕楽園記述』に依ると、

「一昨寡君に陪して雨を城南小笠山に禱る。山脈起伏して層瀾の如し。路益々陰悪、境益々奇秀馬鬣を行くが如し。屏風に縁るが如し。下上みな老龍麟、翠碧洗うが如し。天風時に到りて琴筑を撃つが如し。昨来雲氣紛紜一聚一斂、驟雨時に来たり時に去る。もし厭足一、二日を得れば、地に拆く者漸く合さり、禾の萎む者漸く蘇らん」

と、江戸では見る事の出来ない絶景に心を打たれます。何とか価値ある憩いの場であるから、城主太田資順に進言して保養地としての構想を練ります。此处も財政逼迫の時代であったけれども、賛同した山崎晨園の時を移さぬ経済援助に依って保養地として実現します。藩主資順は松崎慊堂の私案、孟子の『梁恵王章句』の一節を引用し「偕楽園」と名付け、城主自ら墨書して門標を作って、その門に掲げたと云われます。

松崎慊堂の『偕楽園覓桃栽』に依ると、(此处は中国成都郊外の「澆花溪」に在った杜甫の草庵によく似ている。清らかな溪水が幾重にも曲がりくねって、村里へと流れ出ている。河陽縣では桃の花が無数に咲いていると云う。里人が苗木を送れば山は桃で満たされるであろう。)と、この詞を引用して、掛川の偕楽園にも桃が多数植えられる事になりました。更に桜・梅・躑躅等多数の花木が庶民に依って植えられた。『掛川志稿』の一文にも記載されています。この様にして武士も庶民も共に一時期を楽しむ事が出来ました。

時代は過ぎ明治 19 年(1886)周辺の田園地帯から、大量の用水の必要性もあって此处に大規模の「与左衛門池」の造成を行なう事になります。遂に有名な保養地もこの時に池の中に埋没してしまいました。

○水戸「偕楽園」と掛川「偕楽園」

今回の調査で、松ヶ岡で発見された水戸「偕楽園」石碑の拓本は、600 余字の文脈に創設の真実が刻まれた立派なものです。拓本は一部虫喰いの状態から見て、建設当初のものと思われる。天保 10 年(1839)5 月の刻字から推察すると、9 代目水戸藩主徳川斉昭と太田資始が江戸幕府老中時代接触の中で、旧掛川偕楽園の由来から戴いたものと思われます。

水戸「偕楽園」は天保 4 年(1833)徳川斉昭が江戸より帰国して、藩内を巡視した際に千波湖を望む高台に、景勝の地を見付けて造成計画を練り、13 年に開園したと云われます。

この計画と前後して徳川斉昭は、藩士の教育と武芸・身体の健全化を図る為に藩校の建設を思い立ち、「弘道館」の建設を行ないます。そしてこの優れた人材育成の館で鍛錬すると共に、藩士の保養の場として「偕楽園」を切離し不能のセットとして位置づけ造成をします。その趣旨は『偕楽園記』にあります。

「天に日月あり、地に山川あり、万物を曲成して遺さず。禽獸草木、各々其の性命を保つ者は、一陰一陽其の道を成し、一寒一暑其の宜しきを得るを以てなり。諸を弓馬に譬ふ。弓に一張一弛有りて而して恒に勁く、馬に一馳一息ありて、而して恒に健し。弓に一弛無けれ

ばすなわち必ず撓み、馬に一息無ければ則ち必ず殪る。是れ自然の勢なり。…」

この「一張一弛」の孔子の教えの如く、厳しいだけではなく、時には緩めて楽しませる事も大切である。と云う教えに従い「偕楽園」は水戸藩士の毎日の張り詰めた武道の修行や、学問の修行の後は心置きなく休養出来る場として位置づけられています。

掛川「偕楽園」は城主一行が雨乞いの帰途、松崎慊堂の鋭い観察力と山崎晨園等の経済援助で、憩いの広場として造成されたもので、武士・庶民の楽しみの場で水戸「偕楽園」とは開設の主旨が大きく異なっています。又一般に流布されている日坂川坂屋の、掛川「偕楽園茶室」に有った「躑躅の床柱」は、薩摩の島津侯から水戸家に贈られたもので、太田家が上部を下部を水戸家偕楽園の「何陋庵」と2分した由緒あるもの言われていますが、全く時代錯誤で掛川「偕楽園」は文化2年(1805)の築造であり、水戸「偕楽園」は天保13年(1842)の築造で37年もの時差があり一考を要します。

以上を考察して見るに松崎慊堂の「遺文集」にある如く、文化2年(1805)藩主太田資順が掛川城入城時には藩の金庫に1両の金も無かった掛川藩が、文化年間全国に先駆けて「掛川藩校」、「掛川誌稿」、「掛川偕楽園」と云う掛川藩三大文化を作り上げたのは、掛川城主資愛、資順の力量と、企画力実践力に優れていた藩校教授松崎慊堂の行動力と、更に掛川藩の為に強力な支援をした山崎晨園をリーダーとする、金子御用達仲間の多額の資金の結集に成功した事に依るものと思われます。

江戸時代を通じて此の時代ほど掛川藩が活発に文化的に活動したのは少ない。そして三大文化の華と捉える人は居ないが、掛川藩が此の時代に最も活発に文化の向上に力を注いだ事は、史跡として掛川藩校北門書院跡が有り、今は消滅して無いが偕楽園跡も確認出来、記録として掛川誌稿原本写本が松ヶ岡に存在する事等で実証出来ます。今一度考察して見ては如何なものか。